『和』川柳社　11月会報　No.722

定例会2022年11月24日（木）

23年は新しい戦前になる？

ロシアは中国の植民地になる？

子どものとき
意味も分からず何となく
唄った唱歌を思い出す

「里の秋」昭和16年唱歌

ああ　母さんとただ二人
栗の実煮てます　いろりばた
……
さよならさよなら　椰子の島
お舟にゆられて　帰られる
ああ　父さんよ　御無事でと
今夜も　母さんと　祈ります

「もずが枯木で」昭和10年唱歌

兄さは満州へ　行っただよ
鉄砲が涙に　光っただ
百舌よ寒くも　泣くで無え
兄さはもっと　寒いだぞ

岸田内閣は2%の国防費を決めた。いよいよ禁断の人頭税に手を染めるようだ。世界に誇る9条を完全無視。想像したくないがその先は血の海である。その道を阻止する列に立とう。（周）

皆んなで選んだ今月の秀句

いよいよか防衛税に長生き税　小山宏助

9条を蹴散らしこの船どこへ行く　北の山

晴れる日を信じ叛旗の列にいる　遠田亀公子

◆目次

川柳互選・課題吟「信」…2
自由吟……3
推薦句の短評……5
おたより……6
川柳連作／《川柳ひと言》…7
時代錯誤の時実新子……9
ほのぼの川柳……9
竹久夢二「東京災難畫信」⑭…10
「戦争前夜抄」総目次……14
編集後記を兼ねて……16

来月例会案内

1月例会　1月26日（木）
投稿締切　23日（月）
課題「進」　3句以内
自由吟　5句以内
自選句、自解筆もよろしく。

新年1月の例会も誌上です。

11月の川柳互選

◆点の付け方
推薦句◎：2点、準推薦句○：1点
◎3句以内。○全体の半数以内。

◆課題吟「信」（互選）

一人3句以内吐
（投句13人／16人の互選）

2 キリストを信じられずに泣いた春　未知子
2 不支持率なみに募るか不信感　尉
2 信じると思い言葉を投げてくる　ダン吉
2 発言のたびに本物になってくる　ダン吉
2 1 信仰は自分あってのものだから　一角
3 アフガニスタン信仰違いで対峙する　未知子
3 信じようあの目に僕も試される　ダン吉
3 信じますマスクワクチン次は何　白眞弓
4 信じれぬ未来に戦のない地球　立東爺
4 ゆうれいにハンコ押させる信ゆらぎ　一角

---

4 1 自信ない何も無いのが自信　宏助
4 1 敵基地の敵があること信じさせ　一角
4 1 統一教会信仰心を弄ぶ　尊柳
5 政治の闇信頼無くす永田町　尊柳
5 まだ続く更迭予備軍信を問え　北の山
5 溢れてるプロパガンダか嘘発信　高坊
5 1 どこまでを信じていける日本の政治　ふさ子
6 1 自民党信じた者をも裏切って　高坊
7 信を問う岸田首相の聞く力　尊柳
7 世も末よ信なき政治屋の天下　尉
7 1 信じれぬ子の将来を摘む保育園　ふさ子
7 1 ドミノ倒し首相ももはや虫の息　尉
8 1 信心も鰯の頭と木偶の神　立東爺
8 1 息子の生信じ瓦礫に母の背中　立東爺
8 1 信念が有るのか見えぬ議員さん　未知子
8 2 抑止力信じ破綻に向かう日本　撤乗
9 2 不信です身ぐるみ剥がすマイカード　宏助

10 1 出鱈目を信じ家族は地獄絵図　撤乗
10 2 万世一系信じ日本は敗けました　撤乗
10 2 政府見て信じる事ができようか　高坊
10 2 ツボを信じ堕ちるこの世の蟻地獄　亀公子
10 2 愛の手を信じ避難に耐える鍋　亀公子
10 3 信じられない廃炉から再稼働　宏助
11 2 信仰心壺に入れると金が出る　白眞弓
15 5 **晴れる日を信じ叛旗の列にいる**　亀公子

◆自由吟（互選）

一人5句以内吐
（投句14人／16人の互選）

1 下腹のしこりはガンの訪れか　尉
1 政治家に俳句より川柳が良い　宏助
1 ヘリコプタ救難用にいいけれど　一角
1 どことなく家連をかばう政府与党　撤乗
1 しみったれ使った総理バカですな　一角

◆点数表記について
点数右下の小さい数字は、2点句◎に推した方の数です。

2 プーチン曰く「人間は何れ死ぬもの」　未知子
2 岸田総理支持率低下限りなし　未知子
2 映像でさっと流すは日本の技術か　ふさ子
2 黙視のみ強調しても人は育たず　ふさ子
2 後半生悔いあり犬に救われる　尉
2 カニを剥く傍にケイタイ騒ぐ秋冬夜　ひろみ
3 世の中は見て見ぬふりして生き抜けろ　ふさ子
3 いとおしい苦悩しました思春期は　未知子
3 日本海全部日本と勘違い　一角
3 凍みる地に無限軌道と砲の音　立東爺
3 並木道仲良く育つクローンの木　一角
3 戦争か平和かオセロ血の火花　亀公子
3 続けよう不断の努力を諦めず　高坊

4 世界から取り残された和のサラリー　高坊
4 忘れたきことより忘れ難きこと　尉
4 温暖化セイタカアワダチソウ登山中　亀公子
4 年金まで削りやりたいことがある　ダン吉
4 信頼を取り戻せるか死ぬるまで　尉
4 まず窓だむろん平和もウクライナ　ダン吉
4 アラートで机に潜む平和論　立東爺
4[1] 制限なし八波を背負って夜の舞い　ひろみ
5[1] ドイツ戦勝って浮かれた二日間　撤乗
5[1] プーチンを支持する人の顔見たい　未知子
5[1] 神仏に頼る気もなくただ生きる　ふさ子
5[1] 秋が来て気づいた四季の美しさ　高坊
6 ニッポンの石炭多用へ化石賞　尊柳
6 首相とは仲間の権利護る人　白眞弓
6 奴隷死の上に咲いてるw杯　白眞弓
6 弾痕に恨みつらみがつく指紋　亀公子
6 夢で目覚め続きの夢で寝坊する　ひろみ

6[1] 死神が火種を撒けば鳴くカラス　亀公子
6[1] アラートが鳴った皆さんご自由に　ダン吉
7 ニッポンが軍事国家へカジを切る　尊柳
7[1] 大臣の辞任連鎖に泣く総理　尊柳
7[1] 先生を選ぶ地盤は違憲です　立東爺
7[1] 中露では抗議に白いプラカード　立東爺
7[1] 解釈で改憲されて新時代　白眞弓
7[2] 酷葬儀法も市民も塀の外　亀公子
7[2] カニカマの味の進化に食べた気に　宏助
8 預けても不安ぬぐえぬ幼児保育　ふさ子
8[1] 核使用までも公言して恥じぬ　ダン吉
9 無名大臣名前を残し去っていき　撤乗
9 原発事故懲りず無理矢理再稼働　尊柳
8 ウイズコロナ野放しにして第八波　尊柳
8 いつからか給与増えずに税倍増　高坊
8[1] 白い紙振っても逮捕される国　立東爺
8[1] 伝統も歴史も流す世の早さ　ふさ子

8 1 広辞苑書き換え続く国防語　白眞弓
8 1 腰痛が教える老いの許容量　ひろみ
9 1 斜陽国強兵アクセル踏み続け　撤乗
9 2 軍事費の倍増ばなしを平然と　高坊
9 2 ゼイゼイと聞こえてくるは民の声　宏助
10 艶っぽい夢みるうちは生きている　尉
10 シドロモドロ国会中継自己保身　未知子
10 答弁は思わせ振りの的外れ　ダン吉
11 年金を物価に取られ火の車　宏助
11 1 死刑という軽いハンコで死んでいき　撤乗
12 1 ミサイルを買って平和を言うなかれ　一角
12 2 死刑印冗談話にする軽さ　北の山
13 2 またですか更迭予備軍列をなし　北の山
13 4 首相の座すわってみたがハリセンボン　白眞弓
13 4 いよいよか防衛税に長生き税　宏助
15 3 **9条を蹴散らしこの船どこへ行く**　北の山

◎◎ 推薦句への短評 ◎◎

◆ 課題「信」短評

万世一系信じ日本は敗けました　撤乗

● 先の大戦の反省もないままに今日に至る日本。岸田内閣になって軍靴の音がどんどん近づいてくる気がする。（亀公子）

ドミノ倒し首相ももはや虫の息　尉

● 岸田内閣が内から崩壊のきざし。すでに大臣三名が戯、まだ後に続くようだ。不支持率の低下が止まらない。（亀公子）

晴れる日を信じ叛旗の列にいる　亀公子

● いつもながら、亀公子さんの言葉やリズム、内容など、教えられる句ですね。（立東爺）

信仰心壺に入れると金が出る　白眞弓

● お金と救いとは一切関係がないのに、献金したり壺を買うことによって救われるなどと信じさせる統一教会のインチキをうまく川柳にしてあります。（喜之）

《課題句全体の感想》

●今月の課題句はいままでにない不作。何が原因だったのか？　どれも気合いが入っていない句ばかりと感じた。でも自由吟はその逆に受け取れた。

◆自由句短評

ゼイゼイと聞こえてくるは民の声　宏助

●国民生活のひどくなって行く様が「ゼイゼイ」の上句で見事に表現されている。（亀公子）

いよいよか防衛税に長生き税　宏助

●長生きして喜んではいられない。長生き税とは全くもってけしからん。加えて、天井知らずの防衛費の大増額は結局国民へツケがまわるに決まっている。（亀公子）

●岸田総理は大増税を考えているようだ。とうとう人頭税にまで手を伸ばしそうだ。高齢者の保険受給年齢を上げたり、消費税を上げることも人頭税の一種だ。（立東爺）

アラートが鳴った皆さんご自由に　ダン吉

●「ご自由に」に、一本取られる。「勝手にやって下さい」と聞こえた。Jアラートが鳴って、はじめは皆さん対処しようと焦ったが今では誰も反応しなくなった。平和ボケの日本の象徴を見るようだ。Jアラートが鳴った時、政治家さんはどうしていたんだろう？（亀公子）

シドロモドロ国会中継自己保身　未知子

●国会議員の見えすいたウソの言い訳、うまく川柳にしてあります。（喜之）

おたより

◆平野喜之さんより（かほく市高松）

現在統一教会に裁判所から解散命令が出るかどうかに最も関心がある。宗教法人に税がかからないなど優遇されているのは、宗教活動が国民に福利を与えるからであるが、福利を与えるどころか、苦しみしか与えない教団を優遇するなど有り得ないことだ。議論の余地が全くない。解散させるのは今まで放置してきた国の責任である。

川柳連作『恥狂乱』

遠田亀公子

ひかえおろう恥神様のお祭りじゃ
四面楚歌恥上積みの酷葬儀
羞恥心どこへ捨てたか吠えるポチ
金バッチ覗けば恥が舌を出す
あの面で嘘つき通す偽装術
権力とカネにまみれた厚化粧
国を挙げ見せます恥のデナーショウ
金のなる花実にたかるゴマのの蠅
昔なら恥で腹切る武士がいた
平和ボケ恥の地雷を踏むやから

亀公子の『川柳ひと言』

時実新子（ときざね・しんこ）は現代川柳の大御所。多くの本が出版され、彼女に師事した川柳の徒も多い。それは彼女の凄まじい生きざまと川柳への飽くなき追及に対する姿勢が人々を魅了して余りあるからだと思う。

しかし私は彼女の膨大な句の中で好きなのは、以前（2021年7月号）に紹介した「ガム幾万吐き捨てられて沖縄よ」をおいて他にない。これ以外の句から感じられるのは「私」という個の内面を詩的な表現で赤裸々に読む方法に終始していると思うからである。彼女は日本の戦前戦後の混乱期を這いずりまわって生きた人の中の一人。でも彼女の書かれたものを読むと政治や社会への眼はほとんどない。むしろ拒絶しているところがある。鶴彬の句に対してはっきりNoと言い切っていることなどを見れば「やっぱり」と言いたいふしがある。（次頁◆注 参照）

彼女は「私に師と言う人はいない」と言っているが、師とあおぐ人に川上三太郎がいる。五大家の一人、三太郎は実は戦中翼賛川柳を書きながら戦後そのことに口をつぐみ何の反省の弁もしてはいない人だ。彼らの作風からうかがえることは、川柳とは「私」を吐く個の表現文学の一つという主張だと言うことだろう。

鶴彬は国家権力に対峙して句を　（次ページへ）

吐き死を選んだが、時実新子はその道を選ばなかった。どちらがどうと安易に結論ずけるのは早計かもしれないが、少なくとも鶴彬が吐いた句の中に横たわる大きくて重い問いにこそ私たちは彼女の発するものよりも強烈に惹かれる何かを感じるのではなかろうか。でも残念なことに鶴彬は彼女よりはるかに少数派である。もっと鶴彬を追い越す現代川柳を切磋琢磨して切り開いて行かなければと思う。その責任を今月も突き付けられている。（遠田亀公子）

時実　新子
（ときざね しんこ）
本名：大野 恵美子
1929年1月23日
－2007年3月10日
岡山市出身

「花の結び目」
（1981年）

「川柳を始める人の為に　新子の川柳入門」
（1989年）

（◆注）……

時実新子
「花の結び目　新子の表現十一章」
（たいまつ社）172頁より。

「鶴彬の川柳が愚衆の代弁として、国への抗議として、現在までも信奉されることと、一人の二等兵の尊厳なる死とどちらが立派かと問われるならば、私は迷わず後者をとる。二等兵の魂のほうに、より純な美しさと強さを見る。資本主義とか社会主義とかは何も知らず、これを運命とした沢山の人々の壮烈な死。それをこそ、私たちは忘れずに今を生かさせてもらうべきである。鶴彬が実際に戦争へ征ったのか否かを私は知らない。それはどちらでもいいのだ。バット（煙草）を買う金を社会鍋に落とした鶴彬の行為は立派である。が、それをなぜ「川柳」にしなければならないのか。政治や説法は別のところでやってほしかった。借り物のスローガンほど醜いものはない。」

時実新子氏の時代錯誤の社会観を見る

周　立東爺

遠田亀公子さんの「川柳ひと言」で書かれた時実新子著「花の結び目」なる図書が県立図書館にあったので借りてきた。本の題名の傍題に「新子の表現十二章」とある。読むと分かるが、単なる川柳入門書とは違い、「どんな恥をさらしても、これは私の真実である。」と後書きに書いているように著者がこれまで入門書など多数の著書を書いてきた中でもこれだけは書き残したいと、読者や川柳愛好家への「本音の告白」とも言える著書である。

出版は「たいまつ社」で大野 進氏がこの本の出版の経過などを「解説にかえて」として書いている。

「たいまつ社」はご存知「鶴彬全集」（一叩人編）を刊行した出版社である。

大野氏は「昭和五十一年秋、二人の川柳作家の存在を知った」という。それまで川柳には無関心であったそうだ。「はじめて衝撃と緊張を強いたのが鶴彬と時実新子であった。」という。二人の作家を教えてくれたのが、函館に住む坂本幸四郎氏で、坂本氏は「たいまつ社」から刊行された『雪と炎のうた――田中五呂八と鶴彬』を執筆中だったそうだ。これをきっかけに大野氏は「編集者として川柳にのめり込んだという。事実、「鶴彬全集」他、何冊かの貴重な川柳関係の刊行をされた。時実新子にはその作品をとおして、「新子句の世界に一〇〇%、文学を直感し、これが川柳なら、川柳は文学である」と受けとめ、新子氏を識ってから、「この人がただの作家ではない」と気づかされたという。

さて、その「ただの作家ではない」新子氏の鶴彬についての評価を確認しておきたい。

「花の結び目」の九の章は「川柳とは何か」について書かれている。

川柳の歴史をひもとき、井上信子の句**「国境を知らぬ草の実こぼれ合ひ」**などを紹介しながら、「私は

ほのぼの川柳

クリスマスポケモンセンター来てますよ　神田鯛

全国の大会近し我が息子　神田鯛

実業団試合見学勉強だ　神田鯛

沖縄の友が雪だけを見にご案内　東爺

『新興川柳時代』にながい間目をつむって来た。」と書く。その理由を「特にその中を疾風の如く通り抜けたマルクス社会主義とスローガン的作品を見ることで、私のどこかが犯される恐怖があった。」と言う。つまり社会への批判などを表現することへのとまどいである。

「少女期に戦争をくぐり抜け、飢えと紙一重の敗戦後の混乱に身を置いた者にとって… 川柳を手段としつつ冷たい批判の目が光っていたことが私には耐えられない。結果的にはその人たちが正しかった」という。戦後の価値観の転換を素直に受け入れることが出来なかったのであろう。

「鶴彬の死と兵士の死を対比させ、「一人の二等兵の尊厳なる死とどちらが立派かと問われるならば、私は迷わず後者をとる。二等兵の魂のほうに、より純な美しさと強さを見る。」

この発言は戦時中ならさもありなんと「許容」されるかもしれない。しかし新子氏がこの書を上梓したのは一九八一年である。

新子氏は更に続けて「資本主義とか社会主義とかは何も知らず、これを運命とした沢山の人々の壮烈な死。それをこそ、私たちは忘れずに今を生かさせてもらうべきである」と記す。

これは時代錯誤も甚だしい。「沢山の人々の壮烈な死」は国家による侵略の道具にされた犠牲者である。そして、鶴彬は国家の弾圧による犠牲者である。どう考えても両者を対立させて「兵士の死は純で美しく強い」と言い、鶴彬の川柳は「愚衆の代弁」と言い、「借りもののスローガンほど醜いものはない」と断じていることは、許せない。続いて「私は思うのだ。『手と足をもいだ丸太に』誰が好んでするものか。川柳に於てそれを責める鶴彬に私は問いたい。『それではあなたに戦争を防ぐ力があったのか』と。国が生存することは、人生と同じことだ。避けられぬ道なら命がけで通り抜けねばならないではないか。」新子は『手と足をもいだ丸太にしてかへし』の句を、死者を責める句と理解した。そんな程度の理解で鶴彬を語った。

新子氏は、この書を通じて社会を詠むのを嫌うことに拍車を掛けたはずである。川柳界への罪は重いと筆者は考える。

こうした「兵士の死は純で美しい」というのは、戦時中の指導者たちは同主旨の言葉で、国民を戦争へ導いたことは戦後次々に明らかにされた。

代表的な人物の発言を振り返ってみたい。

暁烏敏、西田幾多郎、谷口雅春、ついでにプーチン大統領の犠牲者についての発言。 【以下12頁へ】

連載

東京災難畫信

竹久夢二

十四．見まじきもの

がらッと来ると、細君も子供もおいてきぼりで、家の外へ飛出した良人に、細君が怨じて言ふのだ。

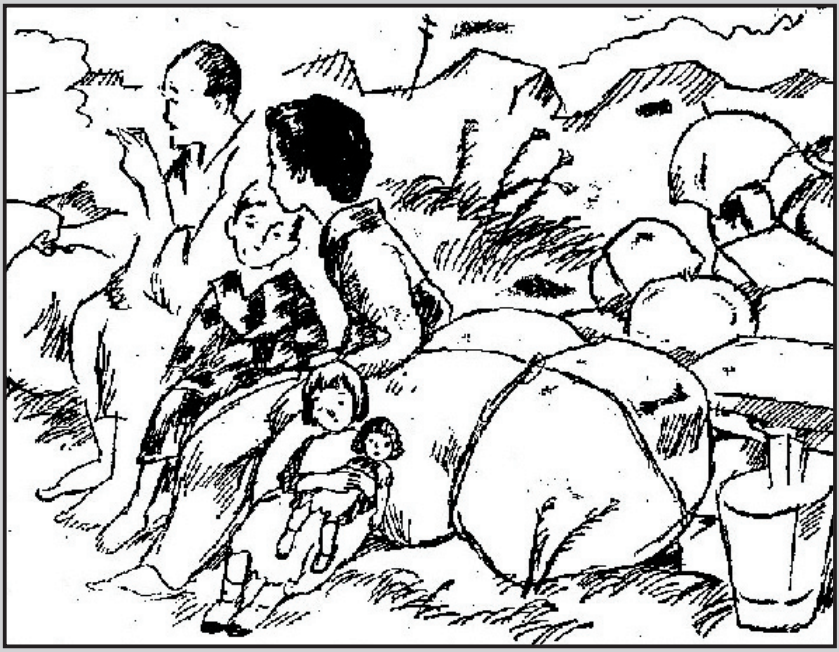
「まああなたといふ人は、私にはまるっきり愛がなかったのね。私よりも御自分の方が可愛いのでせう。」

不幸な良人は、何と言ひ解く術を知らない。

東京から遠く旅してゐたある男は、東京全滅ときいて、立詰の汽車に乗って、清水港から船で、観音岬までくると建物や建具や人の死體が、海一面に浮いてゐるのを見て、東京が全滅しては、最愛の妻も生きてはゐないだらう。涙ぐんで歸って見ると、日頃勝気な細君は、焼出されはしたが、自分の着物と貯金帳だけ持って親許へ歸ってゐた。着たきり雀になった良人は、それでもやっと言ふのだった。

「兎に角、お前が生きてゐて好かったよ」

そんなに心の底まで見せ合っても、生活はすぐに不幸を忘れさせるだらう。

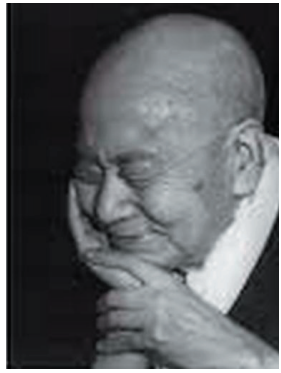


都新聞　大正十二年九月二十七日 水曜日

戦争前夜の竹下夢二は2020年会報9月号～11月号参照

◆暁烏敏（あけがらすはや）の場合

・暁烏は「天皇は阿弥陀仏と同じだ」と説き、仏教界を戦争へ導いた中心人物である。



「太平が続くと、人間が利己的になる。この利己心を打破するには、戦争は最もよい導きである。（中略）利己的生活をしておるものが凡夫であり、自利利他円満の生活をするものは神仏である。」

「戦時に働いてをる軍人は、既に利己的な生活を解脱せしめられて神仏の生活に入らしめられてをるのである。この意味において戦争は人間を浄化せしめるものである。戦争は人間浄化の重大な神業である。」

「私共は戦ひのために戦ひを好むものではないが、戦ひは人間を浄化する神仏のなさしめたまふところであると信じておる。戦争は沢山の人の命を奪います。この点痛心の至りである。しかし、よく思えば、戦ひのために捨てる命は国の命として永遠に生きるのである。天皇陛下万歳と唱えて戦場に屍をさらすものは、神仏の国に生まれるのである。」

「万歳は永遠の生命であり、無量寿であり、阿弥陀であります。これは人間中心の願求であります。その時その処に相応した言葉は最も力強くその言霊を表現します。私共日本人にとりて今日の場合最も適切な救済の言葉は天皇陛下万歳の叫びであります。」（「萬歳の交響楽」より）

◆西田幾多郎の「理屈」から

・西田は「国民は国家のために喜んで命を捧げることができる」と説く。

『場所の論理と宗教的世界観』より。

「国家とは、それぞれに自己自身の中に絶対者の自己表現を含んだ一つの世界である。故に私は民族的社会が自己自身において世界の自己表現を宿す時、即ち理性的となる時国家となるというのである。此の如きもののみが国家である。かかる意味において国家は宗教的である。」

「歴史的世界は、その根底において、宗教的であり、また形而上学的であるの

である」「宗教を否定することは、世界が自己自身を失うことであり、逆に人間が人間自身を失うことであり、人間が真の自己を否定することである」

言い回しは難解であるが、国民は国家のために喜んで命を捧げることができる、大日本帝国の戦争遂行に都合がよいわけである。また「異朝（外国のこと）には甚たぐいなしという我国の國體には、絶対の歴史的世界性が含まれて居るのである」。つまり、世界的自覚の時代に導くための主義を持ち合わせている国は、「己を空うして他を包む」という特有の精神を持つ日本という国以外には存在しないと主張している。（参考＝壺齋散人「廣松渉の西田幾多郎批判」）

・八紘一宇の思想で大東亜戦争を肯定した――

「世界的世界に於ては、各国家民族が各自の個性的な歴史的生命に生きると共に、それぞれの世界史的使命を以て一つの世界的世界に結合するのである。これは人間の歴史的発展の終極の理念であり、而もこれが今日の世界大戦によって要求せられる世界新秩序の原理でなければならない。我国の八紘為宇の理念とは、此の如きものであろう。畏くも万邦をしてその所を得せしめると宣らせられる。聖旨も此にあるかと恐察し奉る次第である。」（『世界新秩序の原理』）

◆谷口雅春「成長の家」教祖の場合

・この人物は現衆議院議員で防衛大臣・稲田朋美が尊敬して止まない人間である。

「たとい戦争で自分の命を落とすも尊き天皇の軍隊の一員として命を落とすのであるならば、それは命を落としても落とし甲斐のあることであった。天皇の命の中に包摂せられて自分の生命が最高のところへ赴くのだからである。」

『『爆弾を抱いて、そのまま敵のトーチカに跳び込め！』これに対して、軍人はただ『ハイ』と答えて跳び込むのである。宗教の修行においては、たとひ教祖の命令通り跳び込まなくとも、『修行が足りない、まだ心境がそこまで達していない』位で許されるだけに、それは修行の『型』をやっているだけである。また、その命令者が教祖という個人である。しかし戦争においては否応はない、言葉通り肉体の生命が放棄せられる。そして軍隊の命令者は天皇であっ

て、肉体の放棄と共に天皇の大御命令に帰一するのである。肉体の無と、大生命への帰一とが、同時に完全融合して行われるところの最高の宗教的行事が戦争なのである。戦争が地上に時として出て来るのは地上に生れた霊魂進化の一過程として、それが戦地に赴くべき勇士たちにとっては耐え得られるところの最高の宗教的行事であるからだと観じられる。(『谷口雅春選集』

◆特別に登場＝プーチン・ロシア大統領の発言

・「母の日」11月27日を前に、ロシア軍兵士の息子を持つ母親たちと初めて懇談した。懇談の様子は国営テレビが放映した。

「人は誰でもいつかは死ぬものだ。問題はどう生きたかだ」

「わが国では約3万人の人々が交通事故で死亡し、ほぼ同じ数の人々がお酒で死亡する。重要なのは、私たち皆が死ぬということ、私たち皆が神の手にいるということ」とし、「いつか私たち皆はこの世を去るだろうが、それは仕方ないことだ。」

「家族はすべての源だ。あなたの子どものほとんどが祖国ロシアを保護することを決めたのも間違いなくあなたの努力の結果」と母親たちを褒め称えた。

連載

戦争前夜抄 ㊷

周 立東爺

「戦争前夜抄」総目次

◆プロローグ 672号(2018・9)
・プロレタリア文学運動の盲点
・戦争が描かれない戦時下の文学
◆第1回 673号(2018・10)
・川柳にみる戦時下の世相
・兵士は戦争を川柳でどう描いたか
◆第2回 74号(2018・11)
・戦争が描かれない?・プロレタリア文学運動の盲点
◆第3回 675号(2018・12)
・考察――戦争文学と鶴彬
◆第4回 676号(2019・1)
・考察――弾圧と拷問
◆第5回 677号(2019・2
・プロレタリア文学運動作家と従軍記
◆第6回 678号(2019・3)
・百人余の従軍作家たち
◆第7回 680号(2019・5)
・反戦詩人 槇村浩を紹介
◆第8回 681号(2019・6)
・従軍作家 林芙美子①
◆第9回 682号(2019・7)
・従軍作家 林芙美子②

◆第10回　683号（2019・8）
・国民を戦争に動員した仏教　暁烏敏①
◆第11回　684号（2019・9）
・仏教と戦争　そして暁烏敏②
◆第12回　685号（2019・10）
・親鸞と日本主義を読む　暁烏敏③
◆第13回　686号（2019・11）
・無節操な暁烏敏　暁烏敏④
◆第14回　688号（2020・1）
・「プロレタリア文学運動の盲点」を『戦争前夜抄』に改題
◆第15回　690号（2020・3）
・石川啄木①
◆第16回　691号（2020・4）
・啄木の大逆事件批判②
◆第17回　692号（2020・5）
・金子文子　自殺への疑問①
◆第18回　693号（2020・6）
・金子文子??自殺への疑問②
◆第19回　694号（2020・7）
・関東大震災／朝鮮人虐殺／甘粕事件／伊藤野枝
◆第20回　695号（2020・8）
・甘粕事件／大杉栄／伊藤野枝／宗一殺害の様子
◆第21回696号（2020・9）
・竹久夢二①　社会主義者だった夢二
◆第22回　697号（2020・10）
・竹久夢二②／与謝野晶子
◆第23回698号（2020・11）
・竹久夢二③　震災画信
◆第24回700号（2021・1）
・足利尊氏①　なぜ悪人なのか?
◆第25回　701号（2021・2）
・足利尊氏②　逆賊から復権へ道のり
◆第26回　702号（2021・3）・これまでの目次
◆第27回　703号（2021・4）
・半藤一利さん最期のメッセージ①
◆第28回　704号（2021・5）
・半藤一利さん最期のメッセージ②
◆第29回　705号（2021・6）
・半藤さんの遺言③「墨子を読みなさい」
◆第30回　706号（2021・7）
・半藤一利さんの遺言④「墨子」
◆第31回　707号（2021・8）
・半藤一利さんの遺言⑤「墨子」
◆第32回　708号（2021・9）
・言論人／桐生悠々の命日
◆第33回　709号（2021・10）
・メディアの戦争責任
◆第34回　712号（2022・1）
・メディアと治安維持法
◆第35回　713号（2022・2）
・治安維持法事件　鈴木義男弁護士
◆第36回　714号（2022・3）
・鈴木義男弁護士の弁護活動②
◆第37回　715号（2022・4）
・鈴木義男③　新憲法の柱を作った
◆第38回　716号（2022・5）
・鈴木義男④　軍事教育批判
◆第39回　717号（2022・6）
・治安維持法事件弁護　自由法曹団
◆第40回　欠番
◆第41回　719号（2022・8）
・世紀の戦争論　アインシュタイン
◆第42回　720号（2022・11）
・この号「戦争前夜抄」総目次

《希望の号があれば、連絡下さい》

編集後記を兼ねて

▼1面に紹介した二つの言葉は年末に登場した。前者は黒柳徹子との対談でタモリ氏が話した。後者はネットで拡散したロシアの未来を予想した言葉。どちらも未来の核心に迫る。▼テレビでは昔の唱歌がよく流れていた。軍歌もあれば童謡もある中、「里の秋」や「もずが枯木で」の二つは、戦時の生活を反映したものだが、子どもの頃は気が付こう筈もなかった。▼年末はいつも川柳関係で忙殺状態で、前年は帯状疱疹を発症し、今年は再発症を心配して恐るおそるパソコンに向かっている。▼22年までにとうとう出来なかった課題がある。故秋山茂氏の「シベリア抑留の記録」、また幾人かから依頼のあった「個人作品集」である。また「アメリカ公文書館への依頼」と、もう一冊「戦争前夜抄」の上梓。ウクライナの悲劇を見るに付け、日本の侵略史の再確認が重要だと思うのだ。急がず焦らず着実に。（周）

「鶴彬を顕彰する会」の通信「はばたき」の購読をおすすめします。年購読／2000円です。

1月例会ご案内（毎月第4木曜日）

◆例会　1月26日（木）◆投稿〆切：23日（月）
◆課題「進」3句以内　◆自由吟：5句以内
◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論などもよろしく。
◆第八波死者急増、例会は誌上となります。
●投稿FAX（076）254-0762　郵送は下段住所へ。
●メールアドレスは下段に。

「和川柳社」会報
会員募集しています！
同　　人：4000円／年
投句／購読：2000円／年
振込は下記へ。

和 川 柳 社 〒920-0335金沢市金石東2丁目15-30（3-2）（渡辺 寛）
電話 FAX：076-254-0762　PC-mail：kananabe@popolo.org
携帯：090-9445-1302　携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp
振込先：北國銀行中央市場支店　#191 普通 640「和川柳社」